

---

## 聖日礼拝説教要旨 2020. 9. 13

### 「血潮によるきよめ」 中島秀一師第一

#### ペテロ 1 : 13 ~ 16

---

「それだから、心の腰に帯を締め、身を慎み、イエス・キリストの現れる時に与えられる恵みを、いささかも疑わずに待ち望んでいなさい。従順な子供として、無知であった時代の欲情に従わず、むしろ、あなたがたを召して下さった聖なるかたにならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なる者となりなさい。聖書に、『わたしが聖なる者であるから、あなたがたも聖なる者になるべきである』と書いてあるからである。」（第一ペテロ 1:13-16）

中心聖句：第一ペテロ 1 : 15 「むしろ、あなたがたを召して下さった聖なるかたにならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なる者となりなさい。」

## 参考聖句

「しかし、神が光の中にいますように、わたしたちも光の中を歩くならば、わたしたちは互に交わりをもち、そして、御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである。もし、罪がないと言うなら、それは自分を欺くことであって、真理はわたしたちのうちにはない。もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる。もし、罪を犯したことがないと言うなら、それは神を偽り者とするのであって、神の言はわたしたちのうちにはない。」（第一ヨハネ 1:7-10）

8月の説教において「キリストの血潮」の著者であるロバート・コールマンの「血は聖書のすべてのページに赤い糸のように織り込まれて、贖いという一つの壮大なドラマを描いている」という言葉を紹介しました。

それから私は「血潮」について考え、自分の言葉で次のようにまとめました。「血潮は創世を源流とし、十字架において本流となり、やがて神の御国に注がれ、大海となる。」

「すべての道はローマに通ず」といわれますが、「すべての聖書の教えはキリストの十字架の血潮に通じ、キリストの十字架の血潮はすべての聖書の教えに通ず。」

今日の主題は「キリストの血潮によるきよめ」です。

「きよめ」は聖書の大切な教えであり、とりわけ「きよめ派」と呼ばれる私たちの教会においては大切な教えです。

改めて本日の中心聖句を見ましょう。

「むしろ、あなたがたを召して下さった聖なるかたにならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なる者となりなさい。聖書に、『わたしが聖なる者

であるから、あなたがたも聖なる者になるべきである。』

### 新共同訳

召し出してくださった聖なる方に倣って、あなたがた自身も生活のすべての面で聖なる者となりなさい。

「あなたがたは聖なる者となれ。わたしは聖なる者だからである。」

### 新改訳 2017

「むしろ、あなたがたを召された聖なる方に倣い、あなたがた自身、生活のすべてにおいて聖なる者となりなさい。

「あなたがたは聖なるものでなければならない。わたしが聖だからである。」

神が「わたしは聖なる者」であると宣言されることは当然のことです。しかし、そのことを根拠にして「聖なる者となりなさい。聖なる者となれ、聖なるもので

なければならぬ。あらゆる行いにおいて聖なる者となりなさい。生活のすべての面で聖なる者となりなさい。」と言われると、私たちは一歩も二歩も引いてしまうのではないのでしょうか。

そればかりか、この言葉の真意を弁えることができないうで、律法主義的になって「恵みを知らないクリスチャン」（行いの罫から脱却できないクリスチャン）に陥ってしまう危険性があります。真面目な人であればあるほどなおさらのことです。

そこで今日は「きよめ」について三つのことについて考えてみます。

- 1 聖化（きよめ）
- 2 聖化（きよめ）の三過程
- 3 聖化（きよめ）の歩み

## 1 聖化（きよめ）

聖書 66 卷 1189 章において語られている聖書の教えは膨大なものになります。その教えを要約したものが「使徒信条」です。「きよめ派」は、それを「新生・聖化・神癒・再臨」、「義認・聖化・栄化」と要約しています。前者はホーリネス教団の創立者である中田重治監督によって提唱されたものです。後者はバックストンの本流である日本伝道隊や日本イエス・キリスト教団において提唱されたものです。前者の「新生」は、後者においては「義認」、「聖化」は双方とも同じです。さらに前者の「神癒・再臨」は、後者では「栄化」になっています。

テキストにおいては「聖なる者」と記されています。この言葉は「きよめられた者」と同じ意です。この言葉には「分離されたもの」と「捧げられたもの」という二つの意味があります。

## 1 分離されたもの

聖化の「化」とは「変わる、変化する」ことを意味する言葉です。道徳的、教育的な意味では、文化・教化・徳化・化育などがあります。「聖化」とは、まさに「聖」と化せられることであって「きよめられる」ことと同義語です。

さらに「聖なるもの」とは「聖と化せられたもの」を意味しています。ギリシャ語は「ハギアスモス（名詞 10 回）、ハギアゾー（きよめる＝動詞 29 回）、ハギオス（きよい＝形容詞 229 回）です。意味は分離され、聖別され、罪から自由にされたと定義されます。

ヘブル語は「カードーシュ」は、光輝、分離、清浄、などの意味があります。この言葉が聖書で最初に使われた記事は創世記 2 章 3 節です。

「神は第七日にその作業を終えられた。すなわち、そのすべての作業を終って第七日を休まれた。神はその

第七日を祝福して、これを聖別された。神がこの日に、そのすべての創造のわざを終って休まれたからである。」

キリスト教会はこの定めに従って日曜日を聖日として礼拝を守っています。本日のテーマは「血潮によるきよめ」です。ですから私たちは「聖なる者」の言葉の意味だけでなく、その本質である「キリストの血潮」にまで探っていかななくてはなりません。

聖書は「キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。」その有様は人と異ならず、おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。」（ピリピ 2:6-8）と記しています。



この言葉はキリストの謙遜という側面もさることながら、キリストが神から見放され、分離され、十字架にかかって血を流されたという側面を見逃してはなりません。

## 2 神に捧げられたもの

聖化とは「この世から分離される」だけでなく、「神に捧げられる」ことを意味しています。つまり聖化とは「神に捧げるために、この世から分離される」ことなのです。

教会（エクレシア）は、「この世から召し出され、主にしている人々の集まりである」と定義されます。まさに教会は「聖なるもの」の集合体であると言っても決して過言ではありません。

先日、神学校アトリーチにおいて「礼拝論」について学びました。多くの内容について学びましたが、結論として言えることは次の言葉です。

「兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である。」（ローマ 12:1）

聖書はすべてのキリスト者に対しては、全身、全霊、全存在を「聖なる供え物としてささげなさい」と推奨し、これが本来の礼拝、「なすべき霊的な礼拝である」と結論づけているのです。この信仰、この霊性、この意識、この生活こそが「聖なる者」の資質に他ならないのです。

聖書は「もし、やぎや雄牛の血や雌牛の灰が、汚れた人たちの上にまきかけられて、肉体をきよめ聖別するとすれば、永遠の聖霊によって、ご自身を傷なき者として神にささげられたキリストの血は、なおさら、わたしたちの良心をきよめて死んだわざを取り除き、生

ける神に仕える者としなないであろうか。（ヘブル 9:13-14）と記しています。

## 2 聖化（きよめ）の三過程

聖書の教えの核心部分は「霊的生命」であり、キリスト教は「いのちの宗教」であると言えます。肉体的生命には「誕生があり、成長があり、死」があります。霊的生命には「義認があり、聖化があり、栄化」があります。ここでは「聖化（きよめ）」の三過程について考えて見ます。

### 1 初時的聖化

私たちの人生は肉体の誕生をもって始まります。同じように私たちの新しい人生は霊的生命の誕生をもって始まります。

私たちの霊的生命は、私たちが罪を悔い改め、キリストを救い主と信じた時に私たちは救われます。「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒 16:31）という約束に基づいています。

ここで約束されている「救い」は、キリストの血による贖いの恵みを総称したものであって、具体的には少なくとも七つの恵みを上げることができます。

これらの七つの恵みとは、①罪の赦し ②新生 ③義認 ④神との和解 ⑤神の子 ⑥永遠の生命 ⑦聖化です。

以上?~?までは、私たちが救われた時点において同時に与えられる神の恵みです。しかし?については、キリスト者として歩いていく過程において成長して行く神の恵みです。新生と聖化は別個のものでも、切り離

されたものでもなく、連続した経験であり、神のみわざです。また、新生は犯した罪（犯罪＝複数）が赦されることですが、聖化は生得・原罪（単数）がきよめられることです。したがって、新生は聖化の初めであり、聖化は新生の成長過程であると言えます。そういう意味でこの段階を「初時的聖化」とか「初期的聖化」呼んでいるのです。

## 2 漸進的聖化

人間の成長、特に肉体的成長や精神的成長などは、例外を除いて、その発達段階に応じて成長して行くものです。

霊的成長の場合は、信仰経験と共に順調に成長して行くかといいますと、必ずしもそうではないのが実情です。信仰歴3年ほどでその信仰が弱まり、教会から離れて行くのが現実です。そこには様々な理由や原因があるのですが、信仰上の行き詰まりも主たる原因の一つだと考えられます。

以上の初時的聖化と漸進的聖化については、多くの教派において共有されている教理であると言えます。

### 3 転機的聖化 = 全き聖化（きよめ）

この転機的聖化は漸進的聖化の過程において経験する聖化を意味しています。この立場をとるのが「きよめ派」なのです。この聖化は、別にキリスト者の完全、第二の転機、聖霊のバプテスマ、全き愛、キリストに似るなどと呼んでいます。

私たちは長い人生において大きな転機となるような試練に遭遇することがあります。私たちはそうした試練に負けてしまうか、反対に試練を跳躍台にして、大きく飛躍するかの岐路に立たされます。同様に私たちの霊的生涯においても、様々な人間関係や自分の内なる汚れに悩み、苦しみ、自分の信仰を真剣に見直す状況に遭遇することがあります。

その時こそが、「聖化（きよめ）」を求める「靈的渴望」の時であり、きよめを追求する正常な信仰状態なのです。もう少し説明しますと、聖化の成長過程において起きる信仰上の悩みは、種々ありますが結局のところ、「自分の意思との戦い、自我との戦い」であって、つまりは「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」（マタイ 6:33）の言葉に帰着するのです。

そもそも私たちが信仰者となった際に、そのしるしとしてバプテスマを受領しました。その意味は「キリストと共に死んで、キリストと共によみがえった者」になったということです。しかし、信仰生活をつづける中でいつしかそのことを忘れ、自分は生きており、キリストが死んでいるような現実を続けてきたことに目が開かれ、信仰復興に目覚める時を神は与えて下さるのです。

この際、必要なことは罪と不信仰に対する悔い改めとキリストの十字架の血潮に対する信仰です。

そこではじめて「わたしは、神に生きるために、律法によって律法に死んだ。わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである」（ガラテヤ 2:19-20）というみ言葉によって、全く新しい信仰生涯に歩み出すことができます。きよめ派の教会はこの経験を、全ききよめ、全き愛、キリスト者の完全、聖霊のバプテスマ、第二の転機などと呼んでいます。

### 3 聖化（きよめ）の歩み

私たちの信仰の歩みは、単なる机上の空論ではなく、実際に生活化されていくことが重要です。ですから「聖化＝きよめ」が信仰の問題として捉えられるだけ



でなく、実際に道徳において、倫理において、多くの人々に示していくことが肝要なのです。その意味においてここで考えてみます。

## 1 聖なるかたにならうこと

- ・心の腰に帯を締め、身を慎み、イエス・キリストの現れる時に与えられる恵みを、いささかも疑わずに待ち望むこと
- ・従順な子供として歩むこと
- ・無知であったときのさまざまな欲望に従わないこと

## 2 光の中を歩むこと

「しかし、神が光の中にいますように、わたしたちも光の中を歩くならば、わたしたちは互に交わりをもち、そして、御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである。」（第一ヨハネ 1:7）

### 3 悔い改めること

「もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しい 　かたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる。」（第一ヨハネ 1:9）

「あなたがたのよく知っているとおりに、あなたがたが先祖伝来の空疎な生活からあがない出されたのは、銀や金のような朽ちる物によったのではなく、 　きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によったのである。」（第一ペテロ 1:18-19）